

『感染症と法の社会史』とコロナ禍

西迫 大祐

1. はじめに

『感染症と法の社会史』は2018年夏に刊行され、その時点では世界的なパンデミックの到来は予期していなかった。今回の報告の目的は、本書の概要を今一度整理し、本書から現在進行中のパンデミックについて、何が語れるか、および語れないかについて考えることであった。

2. 『感染症と法の社会史』の意図

本書を書くにあたって「感染症」をどのようなものと捉え、どの範囲まで考察の対象とするべきかを定めることは難しい作業だった。現代科学を用いて歴史を遡及的に記述するのも有力な方法だが、パンデミックと社会や法の間を考察するときには有効とは言えないのではないかという思いがあった。例えば、人々の噂や恐怖が行政を動かす場合もあれば、司法が、市民の恐怖感を考慮して、科学を超えた判断をすることがある。したがって、人々が感染症だと認識している現象を対象にするような、別の枠組みで考察する必要だと考えた。

この点、フレデリック・ケックの『流感世界』は示唆に富んでいた¹⁾。ケックはパンデミックを人類学における神話概念を使って捉えようとしている。というのも、パンデミックの恐怖は人類全体を襲い、人々はそれに備えることによって、自分が巻き込まれている諸関係について語り、自分特有の脆さについて気づくことになるのだが、この不確実性の管理を記述するために、神話という概念が有効だとケックは考えたからである。

彼が言う神話とは「世界観としての神話」である。すなわち、共通の世界という地平に含まれるすべてのものを知覚させ、この世界を構築される前のものとして表象するものである。「世界観としての感染症」の研究について、ケックはキングとヴァルドの例を挙げている。キングは「新興感

染症」という世界観について、1970年を分岐点として新旧の感染症を分けることで、新興感染症が加速するグローバリゼーションの結果であり、国境を越えることへの警戒・非難が正当化されるようになることと分析している²⁾。ヴァルドは、新聞などのOutbreak Narrativeがつくり出す神話について、SARS蔓延の物語における「患者ゼロ号」や「スーパースプレッダー」という物語が、HIVのガエタン・デュガヤ、チフスのメアリーのケースが参照されながら形成されていった過程を分析している³⁾。本書で採用したのはこの感染症を世界観として考察する視点であった。

3. 『感染症と法の社会史』の研究手法

本書の研究手法は、感染症の予防を、フーコーの「権力」や「統治性」から分析することであった。フーコーは、社会を人間や装置が人間を管理するための戦略的ゲームの場と考えていたが、感染症はそのゲームが戦略的に機能するための理想的な状況をつくり出す。緊急事態であるために、人々が権力や統治に従わざるを得ない状況になるからである。

フーコーは感染症と統治の関係性を三つに分類している。一つ目がハンセン病と法メカニズムである。法メカニズムは禁止と許可という二項をつくり、禁止に対して処罰で応じる。罹患者とそれ以外という大きな分割がなされ、罹患者は社会から排除される。二つ目がベストと規律メカニズムである。規律メカニズムはすべての人々に対して管理で応じる。ベストの発生した地区を基盤割にして、監視官は、人々が規則を守っているか確かめるために、網羅的な監視を行う。三つ目が天然痘と安全装置である。安全装置は人口に対して調整で応じる。罹病率や死亡率などを予測し、コストを計算し介入する。フーコーによれば、現代における「安全」とは、この三つのメカニズムの複

合体のことを指している⁴⁾。本書もフーコーの三つの区分を前提として感染症と法の関係を分析することを目指した。

4. 各章の概要

続いて本報告では本書の概要について章ごとに説明したが、字数の関係上割愛したい。一言だけ述べるならば、本書の特色は18世紀からはじめたことにある。これは、世界観としての感染症を考察するならば、細菌学以前の時代から考察すべきであり、公衆衛生という観念が生まれた背景を考察すべきであるという二点を考慮した結果である。18世紀を扱う第一部は公衆衛生という現代的な統治の基盤にある主要な要素の分析、19世紀を扱う第二部は、実際に公衆衛生が労働者階級をどのように統治するかを分析した。

5. コロナ禍について

不条理な世界を生みの経験が理解できないことによって、世界観の形成が要請されるとすれば、パンデミックはまさに世界観の形成を強要するような出来事であると思われる。特にインターネットやSNSの普及によって、情報とともに感情や恐れなどが伝達しやすくなったために、Outbreak Narrativeや世界観を形成しやすくなったように思われる。こうした傾向に対して行政は、科学的に予防しようとしているが、やはりコロナの世界観を形成していたように思われる。クラスターは、スーパースプレッダーの物語を借用しているように思えるし、「夜の街」や「若者」がステープゴートになっていたように思える。

予防政策を見てみると、ロックダウン、検疫、

統計、衛生パスポートなど、使われた方法は、歴史的にそれほど新しくはないように見える。しかし、今までと違うのは「自粛」を基礎とする用いられ方である。大北は「市民のプロ化」と名づけているが、政府が求めている国民の行動変容は、三密、7割、不要不急などの連続量的指標を用いているなど、リスクマネジメントのプロとして振る舞うことを要請している⁵⁾。すなわち21世紀の規律は、ニューノーマルに順応し、自己点検、自己統治することを求められるような主体である。

一方、本書の視点において語ることが難しいと思われた点が多いが、特に二つのことが挙げられる。一つは戦争の比喩であり、おそらく20世紀的な安全保障と組み合わさる感染症対策に由来する世界観であるように思われる。もう一つは変異であり、こちらは21世紀的な安全保障やsecuritizationの観点において考察すべき問題のように思われる。

文献

- 1) フレデリック・ケック『流感世界』小林徹訳、水声社、2017年。
- 2) Nicholas B. King, 'Security, Disease, Commerce: Ideologies of Postcolonial Global Health,' in *Social Studies of Science*, 2002, Vol. 32, No. 5-6, pp. 763-789.
- 3) Pricilla Wald, *Contagious: Cultures, Carriers, and the Outbreak Narrative*, Durham and London: Duke University Press, 2008.
- 4) 西迫大祐「フーコーにおける感染症と安全」『現代思想』48巻7号、2020年、90-96頁。
- 5) 大北全俊「新型コロナウイルス感染症—行動変容というリスク・マネジメントと責任」浜田明範他編『新型コロナウイルス感染症と人類学』水声社、2021年。

(令和4年4月例会)

日本の発明？ 母子手帳の開発の歴史

中村 安秀

1. はじめに

妊娠したら母子健康手帳（以下、母子手帳）を受取り、妊婦健診の結果を記入してもらい、赤

ちゃんが生れたら、子どもの体重や身長、予防接種の記録を書いてもらう。日本ではあたりまえの光景だが、妊娠中から幼児期までの健康記録を